「ケアリング」をめぐる今日の状況についての考察

A Thought on the Existing Condition of “Caring”

仲　島　愛　子
Aiko NAKASHIMA

はじめに

ケアリングについて考察する前に，ケアということが人間社会に持っていた意味について考えてみる。ケアという言葉を辞書で調べると，「世話をする，面倒を見る，養う，配慮する，気づかう，関心」といった意味が書かれている。この意味からはケアという実践はきわめて現実的な，そして一般的な普通の事柄である。樋口は「ケアリングという人間の行為は，人類始まって以来現在まで，人と人との間に常に存在していた。しかし，ケアリングという現象は，非常に密接な人間と人間の関係の中で起こり，且つ主観的な表現であるため，その効果を計るのは難しい。そのため，これまであまり深く追求されてこなかった。」[1]と述べている。いうまでもなくケアという言葉で表現される行為は，人類の誕生以来の基本的な行為であり，人は人に世話され，関心を持たれ，愛され，配慮され，養われてその生存を確保して来たのであり，それは全人類に共通して基本的な，人間の原初的な生活の営みといえる。それは長い人類の歴史において，家族の中，地域社会の中で脈々と実践されてきた行為であり，人間の生活の一部であったといえよう。

西洋社会ではケアという言葉は最も古いものでは旧約聖書に既に見られているが，新約聖書においても多く見られているので，中世キリスト教社会では，この言葉は何のためらいもなく普段に用いられていたと思われる。またケアという言葉は古くギリシャ神話にも見られていることからも西洋の社会では一般的な言葉であったことが分かる。1860年に出版されたナイチンゲールの「看護覚書」[2]においては看護実践を示す言葉として頻繁に使用されている。又，米国の看護歴史家ドランの「Nursing in Society」(1973年13刷改訂出版)[3]でも，ケアはやはり看護の実践として頻繁に用いられている。このようにケアという言葉は一般社会の中でも看護の世界でも頻繁に使用されるごく普通の言葉であった。

近代になって，ケアの外部化によって看護以外にも様々職業な誕生していったが，様々に機能化し高度に複雑化していった現代の産業社会においては，そのような職業の中においてもケアについての概念が確立していくのではなく，その知識は曖昧となり，見えなくなっていった。それは先に述べた樋口の意見のようにケアは客観化しにくく，また生活の中に埋め込まれているために，明確化しにくい側面を持っていたからである。また高度に機能化された社会のなかで，人間性が喪失されていく過程で，ケアは益々見えなくなっていくと共に，ケアの本来の場所であった家庭や地域社会においてさえもケアの行為は見えにくいもの，はっきりしないものとなり，人々の中でさほど価値あるものとされない位置におかれるようになってしまっている。しかし，このようなケアという概念は，今また新たに現代社会に最も必要なものとして脚光を浴び始めている。

1971年，ミルトン・メイヤロフの「ON　CARING」[4]が出版されて以来，ケアリングという言葉は実践において，また学問領域において取り上げられ，ポストモダン社会における新しい概念として広く普及している。倫理・哲学，フェミニズム，社会学，教育学，宗教学，看護学，社会福祉学の諸分野においてはケアリングに関しての豊かな思索を展開する学者が増えている。しかし

様々な領域において関心を持たれているわりあいには概念そのものが明確でなく，又学問としての守備範囲がどこまでなのか，茫漠と広くてとらえどころがないというのが現状である。科学における一つの概念としても，その基盤が明確ではなく，研究の方法論も定まってはいない。

看護においては1976年レイニンガーが「看護の本質はケアリングであると」[5]主張して以来，ケアリングに関する知識を蓄積してきてはいるが，様々な看護理論の中でその主流を占めるには至っていない。そこには，ケアリングの持つ「目に見えない」本質，「見えにくさ」や，その概念の不明確さが一つのネックになっていると考えられる。

本論では，ケアリングが現代の社会において最も必要とされているものと何故自覚されはじめたのかも踏まえて，概念が明確でないケアリングについて，その発展を跡付け，さらに現在の社会における状況を把握して，ケアリングの輪郭を理解することを目指している。さらに，ケアリングが中心的概念であるとされる看護において，ケアの概念が基礎教育においても，また臨床実践の現場においても中心的課題として認識していくために，看護におけるケアリングの概念化の方法についての方向性を模索したい。

ケアリングという言葉はケアという名詞の動名詞形でケアとほとんど違わない意味で使用されている。看護界ではヒューマン・ケアリングという言葉が広く用いられているが，また、ケア／ケアリングと併記して使われることも稀ではない。本論では便宜的にケアまたはケアリングを文脈に応じて用いていくこととする。

1．人間主義の復興とケアリング—ケアリング概念の歴史

現在は，近代の科学主義，物質主義への懐疑から生まれてきた，人間主義的思想，ことに人間を機械的物質として捉えるデカルト以来の科学の反省から，人間存在を全体的に把握し，人間の経験から立ち上がってくる様々の領域の科学を志向する傾向が生まれており，実存主義哲学の流れの中にあるといえる。そのなかで，人間の生き方，人間関係のあり方などが問われている。

ケアリングの概念が社会的に注目されるきっかけとなったのはミルトン・メイヤロフの「ON CARING」が出版された1971年であったが，彼は1965年の同名の論文で「ケアについては哲学的考察がくわえられてきたことはほとんどなかった」と述べて，その箇所の註で次のように記している。

「ハイデッカーは『存在と時間』の中で，ケアを人間に特有の存在様式であると述べてはいるが，この論文のなかのケアについての考え方は，ハイデッカーの分析に負うところはほとんどない。私の目的はケアのパターンを詳しく考察していく事であって，人間の本質は何かということを確立するものでもない。この論文中の考え方は，非常に異なった形ではあるが，デューイ，マルセル，フロム，バックラー，ブーバーの諸著作に影響を受けている。」[6]

メイヤロフが影響を受けた人物の主な著書を年代順に見ると次のようであった。

マルチン・ブーバー「我と汝」1923年

マルチン・ハイデッカー「存在と時間」1927年

ジョン・デューイ「Common Sense and Science in Knowing and Known」1949年

エーリッヒ・フロム「愛について」1956年

ガブリエル・マルセル「ブーバー研究」1967年

ミルトン・メイヤロフ「ON CARING」1971年，(1965年)

次にこれらの著者のケアについての考察を見てみる。

1）マルチン・ブーバー

マルチン・ブーバーの「我と汝は」[7]1923年の出版である。ブーバーは「ケア」という言葉は使用していないが，その中心の課題は人間と人間の関係であった。そこでは人間が真に人間である根源としての人と人との関係性が「我と汝」として表され，その対比として「我とそれ」が指摘されている。それは近代の人間機械論に見られるような極端な科学主義の対極にあり，また，西洋近代の個人主義を超越するものでもあった。ガブリエル・マルセルは「我と汝」解説において次のように述べている。

> ブーバーがあらん限りの力を込めて示そうとしたのは，彼が間柄の哲学—私としては相互的主体性の哲学と呼びたいのだが—と呼んでいるもののみが人間を、ただ自己自身との関連においてのみ考察しようとする個人主義の袋小路か，それとも社会以外には眼中にない，もう一つの別の集団主義の袋小路から救出し得る，ということである。実際これらのことは唯一つの事態—もはやこの宇宙に安住しえず，その上，各人が常に自分自身その一員だと感じてきた家族といったような，回りを囲まれた諸共同体が，次から次に崩壊していくことを目撃したところの，根こそぎにされた人間性—の相補的表現にすぎないのである。[8]

極端な個人主義的傾向から人と人との関係を強調した彼の思想はガブリエル・マルセルに言わせれば，「ヨーロッパの哲学における画期的な開始を告げる合図」であった。人間関係はケアリングの概念の中での重要なキーポイントであるから，人間関係の根源の問題に光を当てた思想は，同時にケアリング思想の揺籃ともなった。そしてまた当然のこととして，その後のケアリングの考察には度々ブーバーが引き合いに出されることになる。

2）マルチン・ハイデッカー

最初にケアを学問の領域で意識した人物はハイデッカーであったといえる。彼は「存在と時間」[9]のなかで，人間の存在様式が「ケア・気遣い (sorge)」であるとした。彼は人間という存在者の存在そのものを課題とした存在論をテーマとしていたので，その学問において「ケア」そのもの

が探求の対象とはなっていない。しかしその後のハイデッカー解釈者たちはケアリング論を展開している。

マイケル・ゲルヴェンは「『存在と時間』注解」[10](1970年）において，ハイデッカーは「世界のうちに生きることの意味は何か」,「他者と共に在ることの意味は何か」,「現存在（人間）であることは何を意味するのか」という問いに対して，統一的な実存的カテゴリーとして「配慮(sorge・care)」であるとしていると述べている。

米国の実存心理学者ロロ・メイはその著書「愛と意志（1969年)」の「ケアの意味」の章において，やはりハイデッカーを引用して次のように述べている。

「『よくよく考えて見るに，そのケアの構造にこそ自我本来の現象が含まれているのである』とハイデッカーは書いている。我々が配慮（ケア）を怠るとき，自己の存在を失うことになるのである。配慮は存在に帰っていく道である。もし私が存在について心を配るとき，私は，存在者の幸福にある注意を払うことによって，それの面倒を見るのである。一方，もし私が配慮しないのなら，私の存在は分解してしまうのである。ハイデッカーは『配慮を，人間が人間として存在するための基本的構成現象（constitutional phenomenon）である』と考えている。」[11]

これらのハイデッカーの解釈者たちの議論を受けて，看護学者であるシモーヌ・ローチは「ケアリングは人間の存在様式である」とし，「人は自らが人間存在であるが故にケアするのである」[12]と述べて，「私達は，ケアをしなければ，私達の存在を失ってしまう。ケアは存在へ回帰するための方法である。ケアとは原初的なものであり，行為の源泉なのだ。」[13]とも述べている。カトリックのシスターである彼女はキリスト教的ヒューマニズムを背景としてケアリングの存在論を展開し，ケアリングが人間の生存と発達とにとって重要なものでありながら，そのケアリングが社会の中で希薄になっていることを強調している。

メイヤロフは前述のようにハイデッカーからの影響を否定している。かれは人間の存在にではなくケアそのもののパターンを明確にすることを目的としていたので，明らかにハイデッカーの意識とは異なっていたといえる。しかしハイデッカー以降の実存主義的現象学が継承されていく中で，現象学的人間理解やケア研究の方法論として現象学的方法論が，ケアの現象の解明に大きな力となっていく。こういった意味では，やはり，ハイデッカーの影響は大きなものであるといえよう。

3）ジョン・デューイ

デューイの教育学の中で展開されている「ケア」に焦点を当てた研究をしている齋藤は「デューイは教育が，伝統的な農業社会におけるケアリングから区別され，可能性，学ぶ力，成長，経験などをめぐるコミュニケーションとして分出する時代にあって，ケアリングに積極的な教育的

意義を見出している。」[14]と述べて，デューイのケア論を展開している。デューイはケアについて次のように述べている。

「ケアは，いつくしみの意味における何かへのケアリングを通して，そして深く奮起させる事を通しての気づかいから，世話すること，気をつけること，組織的に注意をはらうこと，心がけることまでの範囲に及ぶ。」[15]

齋藤の主張によれば，このようにデューイはケアを定義はしていないが，ケアが分解できない統一的意味を持つ多様のものであり，諸行動を含む言葉のセットに分解されると述べて，デューイの次の文章を挙げている。

「事物の多様性は，色々な種類の何かへのケアリングの基礎を提供しているので，予想されるように我々は、何かへの諸ケアリング価値づくり（valuing）が多くの形態をとることを見出す。それゆえ，その語は，『尊ぶ（prizing），心から大切にする（holding-care），大事にする（cherishing），尊重する（esteeming），感心する（admiring），尊敬する（honoring），是認する（approving），崇敬する（reverencing），支援する（supporting），頼りになる（standing-up-for），または／および誠実（faithful），忠実（Loyal），献身的（devoted to）であること，つまり関心があり（concerned，with），専心する（occupied，with）ことである』ような諸行動を含んでいる言葉のセットに分割されるのである。」[16]

齋藤はここからデューイにとって，なにかへのケアリングは（caring for）は諸行動ということになり，行動である何かへのケアリングは，時間，場所，対象，行為者などとかかわり，それらを横断し，拡大していくのであり，従ってこの拡大した姿が教育，看護，福祉，経済，倫理，論理などとして現れるのであるとしている。

ここには教育という限定した行動におけるケアが取り扱われているのではあるが，学問としての教育の成り立ちにおいて大きな足跡を残したデューイのケア論は，メイヤロフによる「ケアリング」が出版される15年以上も前に既にケアリングの輪郭を明らかにしていたことになる。このことは教育の現象におけるケアリングの意義と重要性を先見したものであるとともに，現代社会におけるケアリングの重要性をリードする思想の現れと見ることが出来よう。

また，教育の分野で最初に実践的なケアリングの概念が浮上した事については，人とかかわる職業である教育が人間社会のなかで早期から人々の文化の中に埋もれていたケアリングの外部化の形で実践され，学問として独立していた事，さらに，教育においては実践理論を必要としていたこととともかかわっていたと推察できる。ここから齋藤のいうように，様々な人との関わりに関

する職業の基礎となる学問の領域での実践理論の中での重要な概念として，また，人が人であることの倫理へ，ケアリングの概念が発展して行くことになる。

4）エーリッヒ・フロム

エーリッヒ・フロムはフロイト左派の心理学者といわれているが，フロイトの心理学にマックス・ウェーバーとマルクスを接木して精神分析学を「修正」し社会心理学を生み出したといわれている。彼は「愛するということ」[17]において，「愛は一人の人への愛ではなく，全ての人への態度である」とし，また，「あらゆる愛の根底にある最も基本的な愛は兄弟愛である。兄弟愛とはあらゆる他人に対する責任，配慮，尊敬，理解(知)である。」と述べている。ここには普遍的な愛の内容としての配慮(ケア)が表現されている。しかしまたフロムは「市場原理」が中心的テーマになっている資本主義社会において「愛は崩壊した」と述べている。

以上から，ケアリングの概念が生まれてくるプロセスで重要なことが三点あると考える。第一点は西洋近代の科学主義，個人主義に対抗して誕生した人間主義，特に実存哲学の影響の中で誕生しているということ。ブーバーは実存哲学者であり，ハイデッカーもまたそのような土壌の中でフッサールの現象学を引き継ぎつつ，実存主義的現象学を確立している。このような学問的な現状の中で人間の生き方としての人間関係や，人間としていきる意味や，「善」，「愛」や道徳の問題にもかかわる重要な概念としてケアリングの概念は立ち上がってきている。マルセルは「この宇宙に安住しえず，その上，各人が常に自分自身その一員だと感じてきた家族といったような，回りを囲まれた諸共同体が，次から次に崩壊していくことを目撃したところの，根こそぎにされた人間性」と表現している。ケアリングはこのような実存主義哲学による人間主義の復興の波の中で育まれてきたといえる。

第二点は，歴史的に人間存在の根源として存在し，きわめて日常的であったケアという営みが失われていった社会になっているという現実から，概念化されねばならなかったものであったということ。前述のように，シモーヌ・ローチはケアリングが人間の発達と生存にとって重要なものでありながら，そのケアリングが社会の中に存在していないことを強調している。また，フロムも「『市場原理』が中心的テーマになっている資本主義社会において『愛は崩壊した』」と述べている。

第三点はマルセルの言うようにヨーロッパの哲学の画期的な開始といわれるような新しい人間存在のあり方，人間と人間の関係性という重要な概念（哲学・実践）の中心的課題として現れているということである。

2．ケアリングの定義・人間関係における「愛」の行為としてのケアリング（哲学，倫理）

1）メイヤロフのケアリング論

メイヤロフはケアリングを次のように述べている。

「一人のひとをケアするとは，もっとも深い意味で，その人が成長すること，自己実現することを助けることである。（中略）ケアすることは，自分の種々の欲求を満たすために，他人を利用するのとは正反対のことである。私が言おうとするケアの意味を，もう一人の人格について幸福を祈ったり、好意を持ったり，慰めたり，支持したり，単に興味を持ったりすることと混同してはならない。ケアするとは，それだけで切り離された感情でもなく，つかの間の関係でもなく，単にある人をケアしたいという事実でもないのである。相手が成長し，自己実現することを助けることとしてのケアは，一つの過程であり，展開をはらみつつ人に関与するありかたであり，それはちょうど，相互信頼と，深まり質的に変わっていく関係とをとおして時とともに友情が成熟していくのと同様に成長するものなのである。」[18]

さらに彼は，ケアの主要な要素として，知識，リズムを変えること，忍耐，正直，信頼，謙遜，希望，勇気の９要素を挙げ詳しく解説している。またその主張には「ケアすることが自己の生の意味を生きる」ことであること，またケアは提供するだけのものではなく相互性を持つものであることを指摘している。端的にいえば，彼の主張はケアが人間として他者の幸せを願ってなされる崇高な愛の行為であり，人間本来の生き方であり，人間にとって徳，善とされる特質を持ってなされる行為であることを示唆したといえる。それはこれまでに一般的な行為とされていたケアに対してきわめて重要な価値を付加することでもあった。そしてこのようなケアの哲学は人間としての道徳・倫理の問題と必然的に関連していくことになる。

2）ネル・ノディングの「ケアリング」（1984年）

村田によれば，彼女は教育者であり，アメリカの基本的な教育も成り立たない過酷な学校教育の実態に直面し，それへの対応に迫られる中，従来の原理枠組み，普遍，科学化、正当化が重んじられてきた「教育哲学」をはじめ「倫理学」「心理学」という従来の学問の枠組み自体に挑戦し，個別的，かつ具体的事象を繊細に記述していく実践的な理論の構築を目指した[19]。ノディングがその出発点に選んだのが「ケア」の概念であった。彼女はメイアロフの議論をさらに発展させた。彼女は「ケアリングの本質的な諸要素が，ケアする人と，ケアされる人との関係にあることはたやすく見て取れる。」と述べて，メイアロフが述べたケアする人の立場だけではなく，ケアされる立場の人にも焦点を当てて，その相互関係性を重視した論を展開している。これは当然教師と生徒の関係として論じられているわけだが，この両者に関する考察はきわめて精緻で深いものがあり，それは単に教育の場での適応ではなく，全てのケアリングの実践の領域に適応されるべき

「個別援助の方法としてのケアリング」の理論である。

彼女はまた，人間関係における善としてケアリングを倫理の課題として取り上げ，ケアリングの倫理が女性性に基づいていることを指摘して「倫理としてのケアリング」も論じている。このとき提示されたケアの倫理は立山の1995年出版の「正義とケア」[20]に詳しく解説されている。また彼女の学校教育論としての理論では，理想とその養育，動物，植物，事物，観念に対するケアリング，それに道徳教育が論じられている。1992年「The Challenge to Care in Schools」においては，学校のカリキュラムはケア（自己のケア，身近な他者へのケア，見知らぬ他者や世界中の人々へのケア，植物・動物や自然環境へのケア，観念へのケア）を中心に編成されるべきだと述べている。さらに1998年出版の「Philosophy and Education」(教育の哲学・ソクラテスからケアリングまで 世界思想社 2006年）ではケアリング理論が哲学理論として「関係的自己論」中心に展開されている。ノディングは現在，米国における現代教育哲学の生成・展開を主導している。[21]

3）日本におけるケア論の展開

①医療政策・社会保障を専門としている広井は「ケアの哲学」を提唱しているが，その著書「ケア学」[22]の中で，基本的に親から子へのコミュニケーションによって情報を伝達する人間は，「ケアする欲求」と「ケアされる欲求」を持つ「ケアする動物である」とし，ケアは「気遣い，配慮，世話」といった広い意味を持つものであるが，それはすなわち他者とのかかわりということであり，人間が普遍的に持っているものである，と述べている。

②堀江，中岡は「臨床哲学とケア」[23]の中で「ケアの営み」として，ケアの多様性と共通性を考察している。多様性としては，社会的・制度的な条件の違い，ケアが向かう対象の違い，個々の場面で実践される個々のケアの違い，その人の心，体，習慣，生き方の違いなど，限りなく多くあり，ケアする者は，常にそうした多様性にかかわり，その多様性の中でケアを豊かに展開している，としている。そこにはケアリングの持つ文脈性，その時々の個々の文脈によってケアは理解され，展開されるという視点が見られる。共通性についてはケアを well—／ill—being という区切りを通した事態へのかかわり，そのようなかかわりによって事態を変化させようとする営みであると述べている。

③最首は「ケアの深淵」[24]の中で，「配慮とか思いやりという水面下のこともケアだし，さらには人間観，世界観，価値観のあり方もケアに関係する。」と述べている。さらにケアの両義性ということを言っているが、それは，ケアには，「ある人が心配で苦しむ」と言うときに使われる「心配，苦労，不安」という「重荷」の意味と，「他人の幸せを準備する」という意味で，思いやりの意識や献身というケアの積極面を表す「気遣い」の二つの意味があると述べている。さらに日本語の「世話をする」という言葉の中には，世話するのは気苦労，世話するのは「嫌だ」というということと，世話されるほうからは，「世話されるのは我慢がならない，心のひだに無遠慮に触れられる，だから世話してもらいたいが，世話してもらいたくない」といった両義性が含まれているの

ではないか，と述べている。ここではケアという行為が極めて繊細な感情の問題であることを指摘している。

④臨床教育人間学会を主催している田中は，「ケアリングの存在条件」[25]の中で，「私達は何故，人に配慮するのだろうか」という問いに対して，「私達はある人が脆弱で孤独な人だからその人に配慮するというよりは，全ての人が根源的に脆弱で単独な生を営んでいることを了解するから，他者に配慮する」のではないかと述べている。そして care という言葉の履歴から，care の第一義的な意味は「心配・苦労・憂慮」であり，「配慮・世話」の意味に用いられるようになったのは15世紀になってからで，care は，もともと生の脆弱な単独性に関わるものであり，単に脆弱な人に対する配慮を意味していたのではない，としている。

また，田中は看護におけるケアを考察して，従来のケアの概念は看護技術を補完する手段であり（看護技術は医療行為を補完するもの，ケアはその看護技術を補完するもの），その点では看護の技術の中でいちばん低い価値しか持たないものであったが，1970年代になって，このケアの中に看護実践の倫理的本質が見出され，それがケアリングと呼ばれるようになったと述べている[26]。

さらに，ケアリングが広まっていった背後には医療権力だけでなく，社会全体の「有用性を最優先する機能的な文化」への反省という構造変動があったとし、ケアリングは「有用性ないし機能性に換言されない行為」であり，その基本的前提は，他者を代替え不可能な固体存在として承認することであり，またその他者との応答（共感・共鳴）の関係を形成することであるといっている[27]。

田中はまた「他者の自己実現を助けることで，自己の自己実現を達成する」という言説を批判して，看護者は病によって生の悲劇性，この世界の不条理に耐えている患者の脆弱な生身の単独性に対して，自分と患者が同じ境遇に生きていることを了解し，そこからケアリングの力を得ていくのであって、「自己実現」となるものと，他者への配慮とは無関係であるとも述べている[28]。

何人かのケアの定義を見てきたが，ケアリングは哲学的に，また倫理的に，根源的な人間の「愛」に根ざした行為と捉えられているといえよう。しかしケアリングの実態はいまだ明らかにされているとはいえない。これまでに考察されているケアリングについての知見が，哲学なのか，実践の指標であるのか，倫理なのかさえも明らかではなく，ある指標を示されているにすぎない。それは実践的な行為の中に埋め込まれていて，きわめて多様であり，焦点を定めにくいためであろう。またケアリングは事柄ではなく，人と人との間に生じる現象であるから，それを定義すること事体無理なことで，それをどのように捉えるかということが問題となることなのではないか。そこには人間の心の内奥の中まで透徹するような思考が必要とされるように思える。これまでの主張の中には，ケアの両義性，ケアの多様性と共通性，ケアリングの動機，ケアリングの構造，ケアリングの特性といったことが言われていた。ケアリングが誰にでも明らかなこととなるため

には，その実態が明確でなければならないのは当然のことであるが，ケアリングについて，表現する方法の問題，全体を把握する枠組みの構成が問題として浮上しているといえる。

3．フェミニズムとケアリング

ノディングの後，キャロル・ギリガンが1982年に「もう一つの声」[29]を出版した。これは副題が「男女の道徳のちがいと女性のアイディンティティ」とされており，ケアの倫理をケアが歴史的に女性によって担われてきていたことから女性の倫理とし，倫理の中心課題である「正義」を男性の倫理としてケアによるジェンダーの違いを明らかにしている。しかしこの主張は倫理学に大きな論争を巻き起こすこととなった。特に女性の政治的，社会的差別を根本のテーマとしていたフェミニズムの学者たちからの反撃は大きかった。ケアリングを女性がこれまで荷ってきた歴史から，これからの世界でもケアリングが美化され，女性性が主張されることで，女性の権利が侵害されていくのではないかとの懸念されたのである。しかし，現在では理念的には，ケアリングが女性に専横されるものではなく，人間として共通に実践されるべきものであることが強調されるようになってきている。ことにフェミニズムによって女性の社会的な差別が明確になった社会において，むしろ女性の倫理としてのケアリングがジェンダーフリーの形で，全ての人々に共有されていくことに希望が見られるとも考えられている[30]。

4．ケアの外部化としての人間関係を中心とした職業における実践理論としてのケアリング

広井は「ケア学」の中で，「現代におけるケアということの大部分は，もともと家族や共同体でおこなわれていたものが，外部化したものである。」とし，ケアは，次の三段階の社会の変化に対応していると述べている。

第一段階 ―「前・産業化（工業化）社会」

ケアは全く外部化されていない社会・家族や共同体の中で「相互扶助」という形で行われていた

第二段階 ―「産業化（工業化）社会」

大家族から核家族化し「夫ないし男性が（核）家族の全体を支える」社会で，妻や子は扶養される。老人の扶養は外部化されていく社会・教育の外部化の進行

第三段階 ―「成熟社会／高齢化社会」

前期・後期高齢者の扶養の外部化，女性の社会進出による家事労働，子育ての外部化[31]

このように地域も家族も個人に分解していく過程で，ケアの外部化は進行し，さらに公的な制度として立ち上がっていくこととなると指摘している。ここでは経済の進化による「豊かな社会」になった結果「個人」は経済的独立を獲得し、それと並行してケアが外部化されていく構図が見えてくる。広井は「このようにバラバラになっていく『個人』という存在を結びつけ，あるいは支

えるものとしての『ケア』という仕事あるいは営みが生まれたのであり，また現代社会はそれを強く必要としている」という。

現代の社会の中でケアの外部化によって職業化した仕事は，教育，看護，保育，福祉，介護とかなり広範囲に存在する。これらの職業においてはケアリングをその実践理論の中に含んでいかなければならないことは当然であろう。しかし，ケアは実践と分かちがたくつながっているため，それぞれの領域で，ケアの概念を明らかにすることは難しく，実践の倫理として模索されているのが現状であろう。

さらにケアリングが人間関係に関連した概念であることによって，最近では実践的には精神科領域のセラピーや家族療法にも適応され始めている。また学問の領域では医療人類学や構成主義に基づくナラティブ・セラピーなどにおける人間と人間の関係性のなかでの，聞くこと，語ることの重要性の観点はケアリング概念ときわめて近いといえよう。また，今日「臨床哲学」[32]といわれる領域でも語ること，聞くことが強調されているが，これもケアリングに近い理論といってもよい。こういった学問や実践にケアリングはどのような形で位置付けられていくのかが課題となる。

5．看護におけるケアリング

看護においてケアリングがはじめて論文として見られたのは1976年，米国のマデリン・レイニンガーの「Caring：The essence and central focus of nursing」に於いてであった。中心的なケアリングの提唱者のケアリング論について考察する。

1）マデリン・レイニンガーの「文化ケア理論」

文化人類学者で看護師であったマデリン・レイニンガーは1965年以来，文化人類学の知見に基づいて文化の中の看護と文化人類学に基づいた看護の研究についての主張をしていたが，1975年以降は「文化的ケア」を提唱し，「ケアは看護の本質であり，看護の明確で，優先的で，中心をなす統一的な焦点である。ケアリングは看護の心と魂であり，人々が専門職看護婦と医療サービスから最も期待するものである。それゆえ，看護婦はこの文化的なケアの価値と信念と実践に関する知識を深め，その知識を健康な人や病気の人のケアに活用するという課題を担っているのである。」[33]と一貫して主張してきた。

ケアが看護の本質であることは，彼女の実践中で体得してきたものであり，当時の様々な科学的看護とは相容れないものであった。またケアと文化は分かちがたく結合しているもので，ケアはその文化の中で考えられなければならないと主張している。人間の生活の中に埋め込まれている文化の中に人々の最も必要とするケアが見出されるのであるから，看護はケアを取り巻く文化に対しての知識を広げ，文化の中のケアを把握しなければならないとも述べている。また様々な文化の中のケアを理解するための方法論として民族看護学を考案している。彼女はこの方法論に

よって23の異なった文化の中のケアを分析している。

「文化ケア理論」について彼女は「文化ケア理論に対する哲学的関心と理論的方向付けは根本的には，全人的看護と，様々な場所と状況の中で生活する人間についての人類学的視点とに由来する。この理論を概念化し開発するに当たって，私は人類学的考察と看護的考察（臨床経験も含め）の両方に依拠した。」と述べている。しかし，この理論は当時の高度に進歩した医学的知識に則り，科学的な看護の知識の開発を志していた看護科学者の大きな反発をかった。ケアは女性的すぎる，ケアは非科学的である，というのが反対の理由であった。しかし，生物物理学的な知識に基づく看護理論とは異なり，臨床での看護の実践から生まれた理論はケアリングの概念の普及と共に，多くの共感者を得て発展し，看護理論の一画を担っているが，いまだ看護の理論の主流となっていない。1978年レイニンガーは全米 caring 研究会を主催し，その後1987年に国際ヒュマンケアリング協会（IAHC）を設立，全世界のケアリング研究者の拠点となっている。このIAHCの研究誌（International Journal of Human caring）は年3回出版されている。また，レイニンガーの民族看護学の研究方法はその後，看護の現象を捉える質的研究方法論として看護の中で広く普及し，看護研究の前進に大きく寄与している。

2）ジーン・ワトソンのトランスパーソナルケア論

ワトソンはケアリングを看護理論として発展させている。彼女の主張はジオルジの提唱する「人間科学」に基づいて看護の理論をたてることを試みており，彼女は次のように述べている。

「人間科学の基礎には美学・人文科学・アート・経験重視の思考だけでなく形而上学までも含んだ認識論がある。看護が従来のサイエンスではなく人間科学の視座を取ることで，人間による人間のケアが持っている・アート・倫理・美学と，サイエンスを結びつけて統合することが可能になる。将来の基礎を見出していくために看護のルーツに戻りつつ、非人間的な価値観ではなく、人間を根底に捉えたこの良質の哲学を基礎として採用すれば，看護の新しい面を発見することも可能となろう。」[34]

ここでは，レイニンガーも直面した看護の科学主義からの決別が示されており，当時勃興していた人間主義的な新しい科学への舵取りが宣言されているといえる。ワトソンの提唱する人間科学に基づく看護の理論の中心概念は「ヒューマンケア」であった。彼女はケアの実践のための10の因子を識別し，また看護におけるケアの価値観を強調している。さらにワトソンのケア論はトランスパーソナルケア論ともいわれている。ワトソンは「患者と看護婦との相互関係におけるかかわりは『我と汝』の関係で，それは内的な力と強さを放出し，人が心，肉体，魂の内部で内的な調和を得られるようにするとともに，翻って，この触れ合いとプロセスが，自然治癒力を生み出し高めていく。」と述べている。ここではケアリングによる患者のヒーリングということが示唆

されている。このようなかかわりがトランスパーソナルケアであり，ワトソンは今日の医学とは全く違った方法でのヒーリングを提唱している。「21世紀の看護―ポストモダン看護，ポストモダンを越えて」[35]においては，彼女の先駆的ヒーリングの技術の開発が述べられている。

またワトソンはケアを理解する方法論として記述的－経験主義的現象学（ジオルジ，アレクサンダーソン，マートン）による方法論を取り上げているが，現象学による方法論はその後の解釈学的現象学による方法論も含めて，ケア・看護の現象の理解のための方法論として看護研究の中では定着している。

ワトソンはコロラド大学看護学部に「ヒューマン・ケアリングセンター」を設立，長く所長を勤めた。この研究所は現在も米国のケアリング研究の拠点となっている。

3）パトリシア・ベナーの現象学的看護論

ベナーは1986年の「初心者からエキスパートへ」[36]という題の看護技術の習得に関する研究で，ケアリングは技術と問題解決能力の習得に不可欠であることを突き止めた。それはドレファスの技術習得モデルを使って，解決の非常に難しい問題には概念的な判断と同時に知覚能力が必要であり，知覚能力を身に付けるには深いかかわりと注意力が必要であることを明らかにしたもので，相手と深くかかわるというケアリングの特長によって微妙な手がかりに気づき，そこから漠然とした感情を抱き，直感で感じ取れるようになることを証明した。高度の技能のあるケア提供者がケアリングの態度で接すれば，バイタルサインの変化などの客観的基準が明らかになる前に，患者の状態の微妙な変化を正確に感じ取ることが出来るが，このような熟達した実践レベルは，ケアリングがなくては実現できないことを明らかにしたのである。

さらに1989年「The Primacy of Caring（現象学的人間論と看護）」[37]では看護におけるケア（気遣い）の第一義性が強調された。

「Caring(気づかい)」と言う言葉の意味

「人が何かにつなぎとめられていること」「何かを大事に思うこと」結果として「巻き込まれて関与する」。それは思考と感情と行為を区別せず，人間の知の働きと存在を一体的に表現する言葉である。人が何かの出来事や他者，計画，物事を大事に思うということを意味する。自分にとって非常に重要な事柄とそうでない事柄，全くどうでも良い事柄がその内部で区別する世界に住むのが人間と言う存在であるとすると，その根本条件をなすのがケアリング，気づかいである。人間の本質的なあり方である世界内存在と言うあり方をその根本で支えているのがケアリングである。」

ケアが人間の存在の形であること，ケアによってその人の人生における，生活における，固有の関心，体験と行為の動機付けがなされること，ケアリングは文脈の中でのみ意味のあること，

ケアリングは信頼の関係であり，そこから効果的な看護実践が可能になることなど，彼女のこの主張にはケアリングに関する基本的で重要なキー概念が語られている。

彼女はハイデッカー，メルロ・ポンティに影響を受けおり，ケアについての考察はどちらかというと存在論的である。ケアが本質である看護の実践において，ケアリングの理論こそその中心であるべきであるとするのがベナーの主張であるが，彼女は現象学の影響の下，人間の理解を現象学的人間理解から導いており，特に病気であることの体験の意味の理解，人生の局面における病気への対処というような視点で，病気を人間の生活における，また人生における意味として捉え、そこに関わるものとしてのケアを展開している。この書物にも，またその後の1999年「Clinical Wisdom and Intervention in Critical Care（看護ケアの臨床知―行動しつつ考える）」[38]でも現象学的方法論及び民族誌学研究法を駆使して，看護の現場の臨床の知（実践知）を明らかにしている。その方法論の一つにはナラティブも用いられて，看護婦の語りの中から現実的な看護の現象を明らかにする試みもなされている。

4）キヤロル・モンゴメリーのケア論「コミュニケーションによる癒し」

モンゴメリーのケア論はその副題でも分かるように，ケアリングとしてのコミュニケーションは患者の癒しになるということ，看護に独自の関わりは効果が明らかなものだとすることである。このことは長く看護婦たちの中では明らかなことであったが，ケアリングの概念が明らかになることで明確になったといえる。ケアリングが看護の重要な焦点であることはこの点でも理解できよう。その点ではワトソンらと同じ考えである。彼女は自己のケアリングの定義を次のように述べている。

> 「ケアリングは，本質的にはひとつの生き方であり，他者に対して自然な反応を示す態度である。ケアリングは個人的なかかわりを求められる，疎遠な態度や無関心などとは対立的な概念である。」[39]

ここではケアリングが人間の自然な態度であるといわれている。これまでのケアリングの定義の中ではケアリングはどちらかというと，その隠れた価値に焦点が当てられてきた。この点ではあくまでもケアの高い価値を追求し，トランスパーソナルな関係まで飛躍するワトソンらの意見とは異なっている。もともとのケアというものは自然で普通のことであったわけで，ここで改めて指摘されるまでもなく，それは自然な反応といえる。しかしケアリングが改めて価値化されたことにはそれなりの意味があったわけだが，今またここで普通のことと考えることが提唱されていることは，ケアのこの二面性に注意を払う必要があることを意味しているといえる。普通に他者と関ることの中にケアリングがあるということと，そのケアリングは人間の行為としては崇高なものなのだということは一見矛盾するようであるが，この二面性を意識することで，「ケアは崇

高で誰にでも出来るものではない」としてケアリングを避ける意識に歯止めをかけられるし，また「ケアは誰にでも出来る意味のないこと」としてケアリングを疎んじる意識からは，それを大切なものとして育む考えが生まれてくるといえる。

モンゴメリーはケアリングの素晴らしさだけでなく情緒的危険性も指摘している。ケアリングの行為が極めて情緒的で状況に巻き込まれる中で実践されるということから，看護婦のように日常的にケアリングを実践する職業ではそれが大きな情緒的な負担になるということを指摘している。このことは「感情労働」として，看護の世界ではひとつのトピックになっている。ケアリングが必要とされ，さまざまな困難のなかでも勇気を持ってケアリングを実践している人々の情緒的負担に対して，モンゴメリーはその対処として個人の資質を高めるために訓練することと，ケアリングを支える状況資源の必要性を示唆している。

5）日本の看護におけるケアリングの展開

日本では，「日本看護科学学会」が1987年に会長・樋口の下で「看護科学の展望」と題する学術会議を開催し，そこでは看護の科学の視点としての「人間科学」がクローズアップされた。引き続きこの学会では1989年第一回国際看護学術セミナーを開催し，ワトソンら米国のケアリングの第一人者を招待してケアリングについての学習を進めた。ついで1992年には第一回国際看護学術集会を開催したが，このときのテーマは「ヒュ―マン・ケアリング：その哲学・政治・倫理」であった。その後，1993年には看護界での中心的な学術雑誌「看護研究」誌が「看護におけるケアリングの概念」特集し，ケアリングの概念が広く看護界に普及し始めた。

日本の看護界には，これまで米国から移入されていた看護理論に対する違和感といったものが存在していたが，これを期に看護についての新しい考えが普及していくことになる。しかし，ケアリングの概念が紹介されてから15年以上も過ぎるが，基礎教育でも，臨床でもまだ十分に普及しているとは言い難い。研究の領域では，臨床研究や教育，特に臨床教育の場面での研究にケアリングの概念が用い始められている。ケアリングそのものを研究テーマにしている研究は少数であり，既成の米国のケアリングの概念から総括的な把握を目指すもの，臨床の現象からケアリングを導き出す努力をしているもの、社会学的な視点から臨床におけるケアリングの実践の包括的なシステムの開発に視点を置いているものもある。

いわゆる「看護論」の中でケアリングを扱っているものはまだ少ないが，池川が「看護－生きられる世界の実践知（フロネーシス）」を執筆している。また、米国を中心に発表されているケアリングの特性の研究を概観し，質的研究方法によってケアリングの概念を導き出そうとする研究もいくつか見られる。以下池川と，ケアの概念の分析に関する研究についてについて簡略に述べる。

6）池川清子「看護―生きられる世界の実践知（フロネーシス）」[40]（1991年）

池川は科学技術といわゆる技術とを峻別し，「科学技術は科学の応用であるが，技術は人間が生

命を維持するための行為，あるいは生命活動そのものである」として，技術は事物や制作や道具ではなく，事物を伴ったとしてもそれは方策であり「武器ではなく，〈戦い〉である」と述べて，そこには人間の主観が働き，その主観無しには技術は成立せず，従って技術は常に一つの目的を持った行動であると主張している。さらにそれはアリストテレス技術論から言えば，いわゆる知性から生まれるエピステーメ（科学的な知）ではないテクネー（技術）または実践のなかに働くフロネーシス（賢慮・思慮）であるとしている。さらに，フロネーシスは科学的な知ではなく，究極の特殊の事実，様々な状況に関わるものであり，しかもそのものの究極の事実（本質）に関わっていると述べている。ここからケアは人間が人間であるための磁場というか根拠であり，人間の本質（人間性）に属する能力であるから、看護の本質である看護のテクネーは配慮的行為・ケアとして現れるとき，それはフロネーシスといえる，と結論付けている[41]。

池川は，ナイチンゲールの著作では，ケアは看護の技術としているが，そこには単なる技術としてではない，テクネーやフロネーシスが明らかにされていると述べている。ナイチンゲールの看護は「アート」であるとされているが，池川はここに、ナイチンゲールの示唆した看護の様々な技術はフロネーシスであったという意味で今日のケアリングであったことを明らかにしている[42]。

7）操華子，羽山由美子らによる「ケア／ケアリング概念の分析」[43]

ここでは，英語圏で発表された47編のケアリングに関する研究（1975～1994年）から，明らかにされたケアリング研究の結果の内容を整理し，共通に明らかにされているケアリング特性を見出す研究をしている。それはケアリングがコンセンサスを得られていない概念で，研究の成果はバラバラで，ジグゾーパズルのようになっている現状の中で，ケアリングの構造を探求することが目的であった。

研究に先立って，この論文では人間の存在のあり様としてのケアリングを次の４つの視点で表現している。

①人間はケア／ケアリングを行う存在としてその生を受けている。

②人間が生存し，生命を維持し，成長発達するためには，誕生のときから他者のケア，多くの場合母性というケアを受けなければならない。誕生した人間は母親，あるいは他者からケアを受け，自分自身の回りを認知していく中で，外界の危険性に関する認識と共に周りの人間への信頼を確立し，その後ケア／ケアリングを自身が行っていく存在となる。

③人間が種族を残し生存してこられたのは人間がケアする存在であったことによると言われている。ケア／ケアリングは母の子へのケア，病む者へのケア，自分自身へのケアとして具現され，看護と共に人類の始まりにその起源がある。

④人が人に対して手を差し伸べ，手をあて，その人のために何かをしてあげたいと思うこと，してあげることは看護という領域に限らず，人が共生していくためには不可欠な人間のあり様である。このような人間のあり様がケア／ケアリングという言葉で言い表せるものであり，

人間としてどのように生きていくかという人間の生の質に影響を与えるものである。

研究の結果として，

a）看護婦の特性の記述（72）

個人の特性（30），親切・優しさ・明るさ等の人間的特性，感受性，コーピング能力，自己観

専門職としての特性（42），態度，知識，臨床能力

b）看護活動（230）

ア，具体的，個別的看護行動，

①身体的/直接的ケア（40），②臨床判断（37），③コミュニケーション（38），④指導教育（33）

イ，看護の提供スタイル（47），患者に看護婦の全神経を集中させる，患者を最優先させる，時，時間外でも患者のために何かを行おうとする努力（extra effort），タッチング，患者の側にいる，患者の権利擁護

c）患者―看護婦関係（ケア提供者）の関係（62），患者と看護婦が日々の看護活動を通じ，両者のかかわりの究極目的であるケアリングに基づく関係（caring relationship）を築き、その関係を深めていくプロセス，及びその関係の機能を含めたカテゴリー

①先行条件（23），患者への関心，心配，患者―看護婦関係を開始する動機，必要条件

②プロセス（22），共感，関与（involvement），患者との共同（collaboration），理解

③関係が持つ機能（17）支持，サポート，力を与える，保護，励まし

d）ケアリングのアウトカム（39）

①患者のアウトカム，肯定的感情，主体的体験

②看護婦のアウトカム，専門職としての自己実現

③両者間のアウトカム，両者の関係を持ったことにより，お互いに利益を得，成長した

最終的に，看護の提供のスタイルは具体的看護活動の質を左右するとことを指摘し，看護の質はケアリングの質として捉えられるとしている。

6．課題

ここまでケアリングについての様々な考察や，方向，そして研究動向を見てきたが，結論として言えることは，ケアリングは，非常に広い学術の分野で用いられていること、特に人間関係が中心の概念であること，しかしその内容はきわめて多岐にわたり，全体を把握するのが困難であること，それらを統括する枠組みが存在していないということである。さらにケアリングの概念の普及の裏には現代の社会の問題，また学問の領域の大きな変化があるということも明らかである。また混乱した現代の様々な問題への解決の方法として真の人間関係，人間としての本質を考える上での一つの指標となっているともいえる。

筆者にとってとっての課題は二つである。

第一点は，現在の状況のなかでおさえられる看護におけるケアリングの概念の明確化である。看護の本質はケアリングであるならば，基礎教育，臨床の看護師の教育にもケアリングの教授は必須のものになる。看護においては概念のコンセンサスは非常に重要である。ケアリングを普及していくためには概念化されなければならない。

マーガレット・ダンロップが言うように，ケアリングを科学として捉えることが出来るのかは明らかではない[44]。操や筒井[45]の研究や米国の様々な研究によっても，看護におけるケアリングの概念が明確になったとはいえない。しかし、ケアリングが様々な学問の分野で検討されることで，より広く深いケアリングの学問的な論議がなされていることは確かであり，そこからの知見はかなり深いものがある。一つの社会的な概念が明らかな形をとるには一般社会におけるあるコンセンサスが必要であり，それは短いスパンで形づくられるものではないが，それは一つの試論と検討を積み重ねながら前進していくものはでないだろうか。そのように考えると，やはりある形のケアリング概念を形成する必要はある。そこで，要素として，あるいは特質としてケアリングを表現するのではなく，またケアリングを理論として分析的に把握するのではなく，これまでの知見を整理して，記述的表現をすることは可能ではないだろうか。

ケアリングが看護の本質であるといわれるとき，それは看護の哲学であるのだろうか。このことについては実践哲学を手がかりに，また最近の臨床哲学を参照にしながら考察してみる。またケアリングの構成とか，構造とか言われていることはケアリングの内容を意味していると思われるが，これまでのような要素的に分解されたものではなく，新しい内容の構築を考える。特に人間と人間の関係性をブーバーとその解釈者たちの考察から思索してみたい。さらにケアリングにおける生活の面，ことに生きるということは本質的にどのようなことなのか，その意味，そして苦難の意味など，生きて生活している生身の人間という視点，これは田中らの臨床教育人間学の立場であるが，この点を深めてみる。ケアリングの価値性と，価値にとらわれないということの両義性も加えて考察したい。また，ケアリングを実践していくときの危険性とは何か，感情労働としての看護の視点や、ケアリングを実践していくためのシステムの問題も取り扱ってみる。こうしてケアリングの輪郭が出来上がったときには，その概念を看護実践の現場，臨床の看護師達に適応して，その評価を明らかにしてみたいと考えている。

第二点はケアリングの歴史的な把握である。看護がケアリングであるなら，歴史的な看護の流れの中で実践されてきたことはケアリングであったことになる。時代，時代の文化の中で，その時代のケアへの意識に左右されながら実践された看護の中にケアリングを見出すことが出来るだろう。近代看護が日本にもたらされた明治の初期からこれまでの看護教育，看護の実践の中でのケアの発展過程を横軸に，ケアの質的変化を縦軸に，新しい看護・看護教育の歴史を明らかにすることが出来るのではないか。それが可能になれば現在の看護師たちが持っているような日本の看護史への否定的イメージは払拭されるのではないかと考える。

また近代になって日本人によって書かれた「看護論」の中にもケアリングは言及されているはずである（ケアという言葉はつかわれていなくとも）。看護の歴史の中に埋もれていたケアリングの視点を明らかにしていくことも重要な課題であると考える。このプロセスは日本の看護論の系譜を明らかにするものになるだろう。ケアリングを歴史的に見ていく場合には，レイニンガーの「文化ケア理論」が手係りなるのではないかと考える。

（引用文献）

1）樋口康子「ヒュ―マン・ケアリングの哲学的側面」日本科学学会誌 Vol. 12 No. 4 . 1992年

2）フローレンス・ナイチンゲール，小林章夫訳「看護覚書」うぶすな書院　1998年

3）Ｊ.Ａドラン「看護･医療の歴史」誠心書房　1976年

4）Milton Mayerroff「ON SARING」Harper＆Row Publishers 1971年

5）Leininger, M. M「Caring: The e ssence and central forcus of nursing」Nursing Research Report, 12 (1), 2, 14. 1976

6）ミルトン・メイヤロフ「ケアの本質」ゆみる出版　1987年　p 213

7）Buber「Ich und Du」1923.「孤独と愛　我と汝の問題」野口啓祐訳　創文社　1958年

8）ブーバー研究・ブーバー著作集10　ガブリエル・マルセル「われとなんじ」みすず書房 1970（1967）p 4

9）マルチン・ハイデッカー，原佑訳「存在と時間」中央公論社　1980年

10）マイケル・ゲルヴェン，長谷川西涯訳「ハイデッカー『存在と時間』注解」ちくま学芸文庫 2000年

11）ロロ・メイ，小野泰博訳「愛と意志」誠心書房　1972.　p 423

12）シモーヌ・ローチ，鈴木智之，操華子訳「アクト･オブ･ケアリング」ゆみる出版 1996年　p 21

13）同上　p 35

14）齋藤勉「デューイのケアリング論」p 86（中野啓明，立山善明編著『ケアリングの現在』晃洋書房　2006年収録）

15）Dewy. J「Common Sense and Science」1949 in The Later Works 16. 1989 p247

16）Dewy. J「The Field of Value 」1949 in The Later Works 16. 1989 p348

17）エーリッヒ・フロム，鈴木晶訳「愛するということ」紀伊国屋書店1991年

18）ミルトン・メイヤロフ「ケアの本質」ゆみる出版　1987年　p 13－14

19）村田美穂「ノディングスのケアリング論」p 92（中野啓明，立山善明編著『ケアリングの現在』晃洋書房　2006年収録）

20）立山善明「正義とケア」（杉浦宏編著『アメリカ教育哲学の同行』晃洋書房　2006年収録）

21）ネル・ノディングス，宮寺晃夫訳「教育の哲学」世界思想社　2006年

22) 広井良典「ケア学」医学書院　2000年　p 1617－23)
23) 堀江剛，中岡成文「臨床哲学とケア」(川本隆史編著『ケアの社会倫理学』有斐閣選書　2005年　収録)
24) 最首悟「ケアの深淵」(川本隆史編著『ケアの社会倫理学』有斐閣選書　2005年　収録)
25) 田中智志「ケアリングの存在条件」p 13（田中智志編著『他者に臨む知』臨床教育人間学 1．2004年　収録)
26) 田中智志「ケアリングの存在条件」p 14（田中智志編著『他者に臨む知』臨床教育人間学 1．2004年　収録)
27) 同上
28) 田中智志「ケアリングの存在条件」p 23（田中智志編著『他者に臨む知』臨床教育人間学 1．2004年　収録)
29) キャロル・ギリガン，生田久美子訳「もう一つの声―男女の道徳観のちがいと女性のアイディンティティ」川嶋書店　1986年
30) ネル・ノディングス，宮寺晃夫訳「教育の哲学」世界思想社　2006年　p 317
31) 広井良典「ケア学」医学書院　2000年　p 23－25
32) 鷲田清一「『聴く』ことの力－臨床哲学試論」TBSブリタニカ　1999年
33) マデリン・レイニンガー，稲岡文昭訳「看護論―文化ケアの多様性と普遍性」医学書院　1995年
34) ジーン・ワトソン「ワトソン看護論－人間科学とヒューマンケア」医学書院　1992年　p 23
35) ジーン・ワトソン，川野雅資訳「ワトソン21世紀の看護論－ポストモダン看護とポストモダンを超えて」医学書院　2005年
36) パトリシア・ベナー，井部俊子訳「ベナー看護論・達人ナースの卓越性とパワー」医学書院　1992年
37) パトリシア・ベナー，ジュディス・ルーベル「現象学的人間論と看護」医学書院　1999年　p1
38) パトリシア・ベナー，井上智子訳「ベナー看護ケアの臨床知―行動しつつ考えること」医学書院　2005年
39) キャロル・モンゴメリー，神郡博訳「ケアリングの理論と実践―コミュニケーションによる癒し」医学書院　1995年　p 13
40) 池川清子「看護―生きられる世界の実践知（フロネーシス)」ゆみる出版　1991年
41) 同上　p 123－124
42) 同上　p 151
43) 操華子，羽山由美子他「ケア／ケアリング概念の分析」聖路加看護大学紀要　№22. 1996．3
44) マーガレット・ダンロップ「ケアリングの科学は可能か」(パトリシア・ペナー編、相良ロー

ゼマイヤーみはる監訳『解釈学的現象21学』医歯薬出版　1994年　収録）
45）筒井真優美「ケア／ケアリングの概念」看護研究　Vol. 26　No. 1　1993年